

1 留学生政策と大学のグローバル化

2018年文科省の中央教育審議会の答申では、「アジアをはじめとするいわゆる新興国が急速に経済成長し、国際社会における存在感が増しており、欧米のみならず、アジアも世界経済の中心的役割を担うこととなるとみられている。」とある。また、世界のGDPに占める日本の割合は低下傾向で、2030年にはさらなる低下が予測される。その一方、あらゆる分野でのつながりが国境を越えて活性化、アジアにおいても人材の流動化、国際間の人材獲得競争がグローバルに展開されると予想されている。

ところで、留学生30万人計画は、2008年文部科学省ほか関係省庁、外務省、法務省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省で決定し、2020年までに日本の文化、社会、高等教育に関し情報発信、高度人材受け入れとも連携させながら、国・地域・分野などに留意しつつ、優秀な留学生を戦略的に獲得する、という狙いがあった。その目標は2019年に達成され、留学生は29万8900人となった。そして、第3次教育振興基本計画（2018～2022）では、引き続き30万人を目指し、外国人留学生の国内就職率を5割にするという指標を出した。

留学生計画は経済開発途上国からの学生の増加で、高度人材受け入れと並行して労働を目的とした学生が多く流入することとなった。一方、日本の大学の現状は、少子化で経営悪化する大学が多く、留学生は大学の収入源となり大学の経営を支えた。

こうした状況のもと、大学では多くの東南アジアや中央アジアのウズベキスタンなどからの留学生が在籍することとなった。ところが2019年以降新型コロナのパンデミックにより学生たちにも変化があった。2021年留学生は24万人と減少している。東京福祉大学でも春期のオリエンテーションやクラスミーティングがオンラインになり、学生が大学に来るのは、学期初めのアカデミック・アドバイザーとの面談、4月の単位登録と健康診断くらいであった。年間行事の宿泊研修や夏休みのアメリカ短期留学も中止になり、学園祭はオンラインでの開催となった。

2 専門科目の到達度 調査方法

高等教育段階においては、今後の成長分野で必要とされる人材の育成や、多様な課題に対応し、解決を図るための実践的・創造的な職業能力の育成について取り組むことが必要となっている。経済協力開発機構（OECD）では、知識、スキル、態度・価値、これからの時代に求められるコンピテンシーを検討し、時代の変化に対応した新たな教育モデルの開発を目指す「Education2030」事業を推進している。

日本では、グローバル化する知識基盤社会に、第3次教育振興基本計画では知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等の資質・能力の調和がとれた個人の育成をめざしている。具体的には、1知識・理解、2汎用的技能、3態度・志向性、4総合的な学習経験と創造的思考力が挙げられる。それらの項目を調査項目とする先行研究がある（南、2012）。そこで、到達目標の項目と到達課題22

項目を参考に、さらに留学生の国や教育歴など属性、また大学をやめようと思ったか、困ったことがあるかなど自由記述欄を加えた調査票を作成した。最初は2017年に留学生を対象に授業で配布、実施、2回目は2019年新型コロナ流行前に留学生に実施、3回目は2020年日本人学生にオンラインで、4回目2022年留学生と日本人学生にオンラインで実施した。これらから到達度の評価をして概要を捉え、さらにコロナ禍の影響について聞き取り調査を行い事例分析し、留学生の置かれた状況を把握することとした。

3 コロナ禍が留学生に与えた影響と課題

新型コロナウイルス感染症を契機として、教育の在り方が大きく変わり、グローバル化やデジタルトランスフォーメーションを推進する時代となってきた。オンラインになり、海外から授業を受ける学生も何人かいる。高等教育においても、デジタル機器を使ったオンライン教育がどのような変化をもたらしたのか。そこで、コロナ禍以前の2019年調査と、コロナ禍での2022年調査の結果を踏まえ、留学生にもたらされた多くの困難な状況を検証することにした。日本人学生と留学生との生活基盤の相違からくる学生生活への影響、留学生にとって新型コロナによる困難な問題を、検討したい。

(1) 2019年調査では、社会福祉を学ぶ学生は、学期を通して2回の調査時での日本人学生に比べ基本的知識や主体的学習習慣が伸びていないという結果が出て、教育効果ははっきりとは出ていなかった(留学生37名、2回とも出席している16名を対象としWilcoxonの符号順位和検定)。その学習効果の出ない要因を探ったところ、母国での教育システムの違い、漢字圏など言語の問題、国民性ともいえる価値観の相違などが要因と考えられた。学習意欲をささえる要因は前回の調査で分析している。

(2) コロナ禍のもと、留学生の中には、生活費に困り退学を余儀なくされた学生や退学を考えた学生がいるが、十分な支援はされていない。留学生の問題を、1. 経済的問題 2. 精神的問題 3. 制度的問題(社会的問題) 4. 学習の問題 5. その他と分けて問題を分析することにした。1. 「大学をやめようと思ったことがあるか?」との質問に、日本人学生(25名)では「ある」「ときどきある」が16%であったのに対し、留学生(16名)では37.5%と多かった。2. 日本人学生は、大学に来たのにオンライン授業で友人ができず、クラブ活動もなく大学生活に意味を見出せないというが、留学生では2年半国に帰れずホームシックになった、口語の練習ができない、誰とも会わず日本人と話すことがない、などと深刻である。多くの学生はオンライン授業に不満や戸惑いを感じている。

留学生と日本人学生のコロナ禍の学生生活への影響の度合いはどのように違っているのか、共通点、相違点を検討したところ、留学生のほうに影響は深刻であった。コロナ禍になって困った点では、留学生ならではの悩みがあった。それらを、留学生の語りを中心に分析する。留学生にとって、本当に必要な支援とは何か、解決し難い困難な問題とは何か、明らかにしたい。

このコロナ禍の中で、教員や大学には何ができたのか、社会が支援できなかったとしたら、それはどのような原因によるのであろうか、共に情報を共有し検証したい。